

# GISによる近世隠岐の村落景観

溝口常俊

名古屋大学大学院環境学研究科

## I はじめに

本稿は、貞享5年(1688)に記された隠岐の地誌『増補隠州記』<sup>(1)</sup>の内容を紹介し、近世における地域研究の一助に資するものである。筆者は、近世あるいは明治初期において、全国統一規模での調査はされていないものの、一国規模の広がりで見られる地理書に注目し、村落単位で記載されている基本的な情報を忠実に、かつ多角的に読みとり、GISの簡易ソフト「MANDARA」を使用して計量化、地図化を心がけてきた。計量化、地図化が最終目標ではなく、こうすることによって、単なる一村落到限った研究を超え、村落比較、村落間関係を明らかにし、その史的展開を重視した地域構造史研究へと進むことを目的としている。

こうした問題意識のもと、筆者は『寛文村々覚書』(1672)、および『尾張殉行記』(1822)を読み『江戸期なごやアトラス』<sup>(2)</sup>を上梓し、目下、その続編として『江戸期尾張アトラス』を作成中であり、同時に明治2年『美濃国村々明細帳』、明治14年『岐阜県各郡町村略誌』のデータベースを構築している。隠岐の地誌『増補隠州記』の分析はこうした一連の作業の一コマである。

## II 『増補隠州記』の記載内容

隠岐は島前と島後に分かれており、前者は海士郡と知夫郡の2郡13ヵ村、後者は越智郡と周吉郡の2郡49ヵ村からなっている。現在の行政区画では、島前の海士郡は海士町(中ノ島)、知夫郡は知夫村(知夫里島)と西ノ島町(西ノ島)、島後の越智郡は都万村、五箇村、周吉郡は西郷町、布施村にあたる。

本稿で取り上げる貞享期の郷村集成である『増補隠州記』は、全国的に農村経済の転換期に直面して、幕府財政が悪化していたころに作成されたものである。幕府は、天領からの年貢収納量を増加させるために、まず地方行政官の腐敗肅正に乗りだし、貞享4年(1687)6月勘定組頭に全国総代官の会計検査を命じた。こうして編まれた『増補隠州記』は、貞享5年6月両島公文が立合って作成し、松江藩派遣の郡代代官の点検を受けている。彼らは編集完了までは隠岐に留まり、貞享5年7月大森代官が赴任して引継を終ってから帰藩した。永海一正によれば、基礎資料は貞享4年の「郷帳」であり、たぶん前年の勘定組頭の命令ではじめた隠岐の会計(行政)総点検作業であって、そのまま引継資料となったわけであろう、としている<sup>(3)</sup>。



図1 隠岐の集落

### III 中世隠岐の村落社会構造

戦国時代毛利氏の支配の後、慶長5年(1600)に遠州浜松から堀尾吉晴が出雲・隠岐に転封され、忠氏、忠晴と3代続いた。その後寛永15年(1638)に幕府は隠岐を直轄領(天領)とし、これを松江藩預けとし、松江藩からは郡代・代官が派遣されて隠岐の行政にあたった。全島検地が完成したのは慶長18年(1613)で、牧畑が全島に普及しており、田畑合わせた検地高は1万1千石余とされた。屋敷請は御免屋敷と御役目屋敷に大別され、夫役免除が御免除屋敷で、村役人、寺、社、特殊職業者(大工、鍛冶等)などがこれにあたる。一方御役目屋敷とは夫役を負担する(御役目)百姓で、反対給付として一律に3畝ずつ与えられる。この1軒役の夫役を負担するのが本百姓である。この役屋体制(夫役負担体系)から高請体制に基準を置く本百姓・水呑体制に編成替されたのは承応年間(1652-54)である。つまり徴税が村高に賦課され、農民の持高によってその負担が割賦されるようになったのである。

こうした支配体制が強化された時代に、隠岐の土地、村境が余すところ無く調べ上げられた。例えば仕置役人岸崎佐久治の手による『田法記』(寛文6年)、郡代として赴任した斉藤勘助の『隠州視聴合記』(寛文7年)などがあり、本稿で取り上げる貞享期の郷村集成である『増補隠州記』もその1つである。

### IV 近世村落の立地と村高

#### 1. 村落の立地

近世隠岐には、4島合わせて59の村落が立地している(図1)<sup>(4)</sup>。この内、島前3島の13カ村すべてと、島後46カ村中33カ村は海に接しており、山がちの内陸村は島後の13カ村にすぎない。島前、島後という地理的位置による区分が全面に

この『増補隠州記』の記載項目を、最初に登場する海士郡海士村の場合を例として次にあげておきたい。公文名、年寄名、本田畑および新田の面積と石高、小物成(竈役銀、漁請役、牛皮役など)、戸口(百姓・間脇・御役目屋敷;男女、坊主・禅門・比丘尼)、牛馬、弓・鎧・鉄砲、寺社、島、郡境、道積り、雨堤、主要漁獲物・特産物などである。こうした記載内容を各村別にデータベース化した。

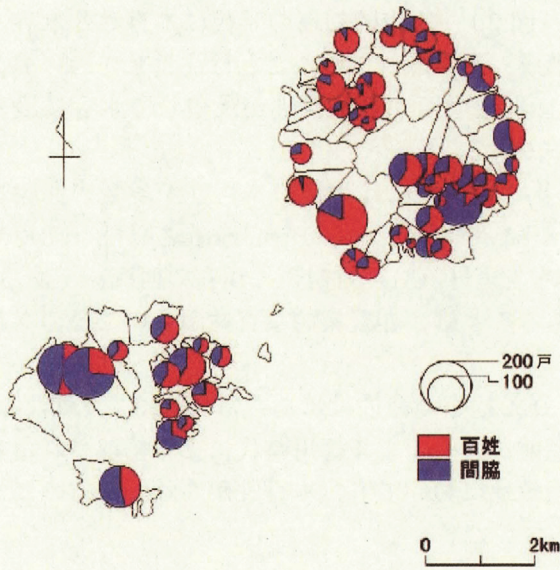


図2 百姓と間脇 (1688)

をもつ村も相当数 (16カ村) あり、島前3島のほとんどの村落がこれに当たる。これらに対し島後の周吉郡南部に基幹集落の他は1軒ないしは数軒が散在する形の村が若干みられた。

## 2. 村高

近世村落の土地を基準とした評価として村高があり、その規模でもって村落規模を検討してみよう。隠岐全59カ村の1村平均は203石7斗であるが、最大3カ村、最小3カ村をそれぞれ挙げると、最大1位が浦之郷の1186.2石、2位が海土村の1081.4石、3位が知夫里村の863.7石で、これらはいずれも島前の3島それぞれに属する村である。最小1位は岸浜の9.1石、2位は箕浦の11.9石、そして3位は飯美の20.3石で島後の海村である。

村高を、先に示した集落立地 (海村、山村) で比較すると、海村 (46カ村) の1村平均石高は216.7石で山村 (13カ村) のそれは157.6石と50石もの開きがある。本州の平野村から比べれば、可耕地面積の少ない島嶼の村高は極めて乏しい訳であるが、その島嶼にあっても海岸添いの海村はまだましで、島の中の山村は極貧を強いられているように見える。

## V 戸数・人口

### 1. 戸数

1村平均の戸数 (家数) は55.7戸で、これは戦前の日本の平均的農業集落規模とほぼ同様である。その家がさらに百姓と間脇 (水呑) に区分して書かれており、その比率こそ多少の差があるものの、1村 (一宮: 百姓12戸、間脇0戸) を除い

てすべての村に両者が混住していた（図2）。比較的初期の時代に本百姓と水呑という2つの階層の百姓から各村落が構成、運営されていたことは注目しておいてよからう。本州でよくきかれるように18世紀中頃から本百姓が没落して水呑に没落していく経過をとった地域とは異なっている。

基本的には本百姓数が間脇数より多いが、中には少数の本百姓が多数の間脇を抱えている村もある。特にその傾向が強いのが西ノ島の中心地浦之郷村（53戸対149戸）であり、島後の玄関ともいえる矢尾村（31戸対74戸：現在の西郷）である。全村の中で最も都市的集落に顕著であることは、非農業的な百姓が多いことのあらわれであろう。

各村には本百姓、間脇の上に立つ公文とその補佐役にあたる2、3人の年寄がいた。公文は中世荘園時代の荘官の名前が、そのまま徳川時代にまで持越されたものであり、村落内の最上層を占め、屋敷地においても、本百姓が3畝であるのに対し、公文は8畝以上の御免屋敷をもっていた。

## 2. 人口

人数の記載は男性、女性に加えて、坊主、禅門、道心者、神主、比丘女、座頭および山伏の合計数で書かれている。坊主は全村59ヵ村中48ヵ村に登場し1村平均3.0人（最大は海士村の12人）、禅門は30ヵ村、平均1.0人（最大は美田村の5人）で他はいずれも半数以下の村にしか姿をみせず、したがって1村平均も1人未満である。ただ、これら宗教関係者が1人もいない村はわずか3村にすぎない。地域的な分布においては、知夫里島、西ノ島諸村に道心者が集中して存在しているのが目立つ。

男女数を性比（女性100人に対する男性数）で示すと、全村平均では102.1と若干男性が多い島ということになる。この時代、一般的に日本の農村では男性数が1割以上勝るのが普通であるので、それに比べれば女性が比較的多い地域と言えよう。島の中であえて地域的な差異を認めるとすれば、島前に女性が多く（96.1）、島後に男性が多い（103.9）といえるし、漁業・海運に関係の深い村落（船5艘以上所有）39ヵ村とそうでない村落20ヵ村とでは、後者の105.8に対して前者は100.3となり、前者で女性の数が相対的に多い。海難で男性が亡くなるというのはよくあることで、それが原因なのか、あるいは海女漁とまではいれないが漁業活動に女性労働が必要なのか、明確な理由はわからないが、漁業・海運業が性比に何らかの影響を与えているのではないかと思う。

1戸当たり世帯員数を示すと、隠岐全村での1村当たりの数は5.5人で、これはかなり少ないといってよからう。村別の格差はほとんどなく、7.0人を越えるのは海士郡の海士村、宇津賀村と周吉郡の平村3ヵ村に過ぎず、逆に少ない方でも4.0人を切る村は1村もなかった。同じ島ということで享保11年（1724）の屋久島（約10人）と比較するとその半分にすぎない<sup>(5)</sup>。傍系家族が同居していた屋久島のほ

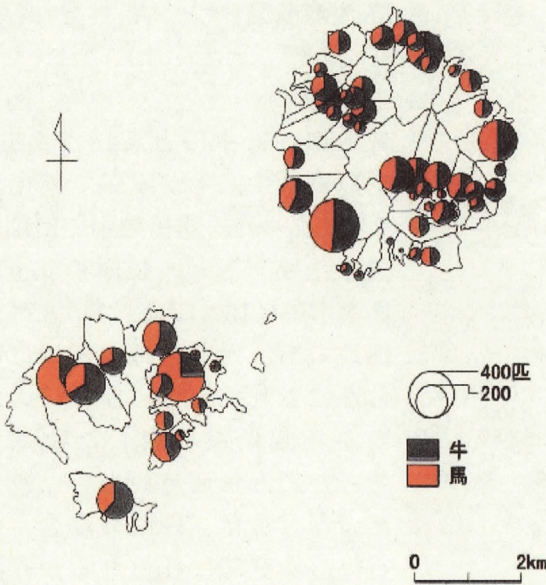


図3 牛と馬 (1688)

あった。その牧畑に欠かせないのが4年に1度の休閑地を利用しての牛馬の放牧である。それ故、隠岐には牛馬が多い。牛、馬のどちらが多いかというと、若干牛が多いとはいえ馬も多く、全島で牛3687頭、馬2971頭数えられた。これらがすべての村で飼育されていたのであり(図3)、1村平均は牛62.5頭、馬50.4頭、さらにこれを1戸当たりに換算すると、各百姓世帯が牛、馬各1頭所有していたことになる。地域的に見れば西ノ島、知夫里島ではほぼ全村で、中ノ島では海士村、そして島後の隠岐島では北東から南西にかけての島を横断する諸村で牛馬合わせて200頭以上飼育していた。島前で牛馬を生産し足腰を鍛え、草野豊富な島後で肥育するのが古くからの慣例であったようだ<sup>(6)</sup>。

三橋時雄は、寛文2年(1662)の元屋村差出帳をもとに、4軒の間脇(無高)以外の百姓は、全部が、そして僧侶、神主までも牛馬を飼養していることを示した。その中であって公文、年寄、役人などの上層部は、飼養頭数が多くなっていることから、これらの者が名子、間脇等の隷属農民を従えて、地主手作的経営を行っていたのではなかろうか、と推測している<sup>(7)</sup>。この推測を良しとするならば、年代的にもそれほど経っていない貞享5年(1688)において、その牛馬数がそれぞれ35匹、25匹であり、それは寛文2年同村の牛28匹、馬28匹とほとんど変わっていないことから、貞享期にも同じ様な経営が行われていたものと考えられよう。

ただ、その後元禄期ころから、牧畑も雑穀作よりは牧場として、内地の農村地帯への役牛供給を目的とした子牛生産をおこなうことに重点が置かれるようになり、隠岐の牛も次第に島外へ商品として販売されるようになっていった<sup>(8)</sup>。

うがむしろ例外といえるが、隠岐にはそのような複合家族構成はみられなかったようである。人口密度は村境が正確でないため明らかにしえないが、その代用として田畑面積(反)当りの人口を算出してみると、全村平均は丁度反当り1人であったが、広大な畑地(牧畑)の多い島前の村(0.3人/反)とそうでない島後の村(1.2人/反)では大きな差がみられた。

### 3. 牛馬

隠岐の典型的農業経営に牧畑があり、近世はその全盛期で

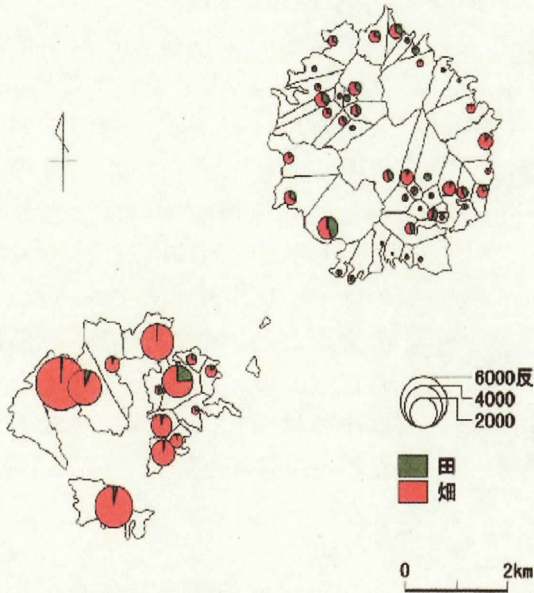


図4 本田畑(1688)

ある季節には作物(大豆・小豆・大麦・小麦・粟・稗など)を栽培し、他の季節には牛馬を放牧するというふうに、耕作と放牧とが輪転する、いわゆる耕牧輪転農法のおこなわれる畑地(このばあい畑は山とも牧ともいわれる)のことで、ひいてはそのような耕作(畑)と放牧(牧)とを交互に輪転する牧畑式ともいべき農業経営方式をも意味する<sup>(9)</sup>。時代はさがるが、寛政7年(1795)の郷帳によれば隠岐全島で田高、牧畑高、麻畑高、上畑高が記されており、それぞれ4453石、5093石、118石、31石とある<sup>(10)</sup>。反当たり石高は水田が畑地より高いので、面積を比較したら水田より畑地の方がかなり多く見込まれ、その中であって圧倒的面积を牧畑が占めていたことになる。

さて、貞享5年(1688)の本田畑を村別にみたのが図4である。島前(海士郡・知夫里郡)の村々の方が島後(越智郡・周吉郡)よりも田畑面積が多く、かつ畑地(牧畑)が広く展開していたことがわかる。前者13ヵ村の1村平均田・畑が水田は、規模は小さいものの、有る程度の河川が居住地を流れる村落に、多くみられた。島前の海士村574反、島後の都万村509反、原田村260反などである。しかし、少ないとはいえ、すべての村落が水田を開いていたことは、稲作志向の強さの現れでもあり注目しておきたい。

## 2) 新田畑

隠岐では、天正19年(1591)に太閤検地、別府村だけに残る慶長4年(1599)検地、堀尾時代に入ってから、いわゆる古検といわれる島後で実施された慶長12年検地および島前での慶長18年検地があるが、松江藩へ預け地となった寛永15年

## VI 生産基盤

### 1. 農業

#### 1) 田畑

田畑には本田と新田があり、全島総計で97%が本田で新田は3%であった。本田の中で田畑面積を比較すると、総面積36,979反中水田は15%に過ぎず、85%が畑地であった。畑地の詳細は明らかにされていないが、その多くが丘陵地を利用した牧畑であったことは間違いなく、牧畑という言葉は、隠岐の場合、いろいろな意味に使われるが、狭義には、施肥農業のおこなわれる普通の畑地(年々畑・麻畑)とは別に、その外側であって、

(1638)時点での田畑を本田畑、それから後の検地で加えられたのを新田畑と呼んだ<sup>(11)</sup>。貞享5年までに開かれた新田は本・新田総計のわずか3%に過ぎない。しかし、ほとんどすべての村で新田畑が開かれたことは注目されよう。新田が1筆も開かれなかったのは宇屋村のみ、新畑が全く開かれなかったのは海士村他13ヵ村にすぎなかった。牧畑の多い島前の知々井、崎などの諸村では水田よりも畑地を開く傾向が強く、逆に島後では重栖川河口の南方村や八尾川中流の原田村など河川低地の水田化が目立った。

### 3) 農産物

租税の対象として米・麦・雑穀が納められていたが、その量は『増補隠州記』からは不明である。ここでは小物成として、農業関係の品目をあげ、その分布を村別に見てみよう。まず、核苧役（麻）は島全村に課せられており、麻栽培が盛んであったことがうかがわれる。油役は、柄油（椿油）と絞油（菜種油）の2種類あって、前者は島前の中・西ノ島および島後の北部諸村、後者は島後の南部諸村に特化して見られた。茶役と漆役はともに島後の山地部諸村に多く見られた。その他に椎の実役と山椒役があったが、前者は島前の美田村1ヵ村のみ、後者は島後の那久村にのみ課せられていた。

## 2. 漁業

隠岐の生業の主役は、牛馬を利用した牧畑とならんで漁業であったことは、その小物成（租税）が詳細を極めていることからわかる。まず、営業税としての漁請役を村別に示すと、もっとも高額税を負担していたのが西之島の浦之郷で銀200匁、続いて島後の南端の小さいな岬に立地する津戸村が173匁、その東隣の同じような岬に位置する蛸木村が146匁であった。後2者の農業基盤は極貧で田畑総面積がそれぞれ90反、111反（隠岐全島の平均は645反）を示すに過ぎず、それ故漁業への依存度が高い。

漁業関係の小物成を村別に示すと、隠岐の中で海産物の特産地形成がかなり明確になされていることがわかる。イワシとトビウオは浦之郷村、ブリは中之島全村と島後南端諸村、スルメは中之島の崎村と島後の大久村と久見村、串アワビは中之島全村、知夫里村、島後西部諸村というように分かれていた。そんな中でコンブは大半の海村で、塩は島後の多くの海村で産出されていた。

古代、延喜式に隠岐では干アワビ、ナマコ、スルメ、ノリなどがみられ、近世になっても、これらは長崎俵物として隠岐の代表的な水産物であった。塩が広範に産出されていることは、塩漬けにして魚介類を長持ちさせるためにも必要であったことがうかがえる。長崎俵物の他に、ブリは米子、境港市場を拠点として美作、備中に、塩サバは若狭方面から近江、尾張地方に市場を広め、トビウオはその淡泊な味が京都、伊勢で好評を博したという<sup>(12)</sup>。

実際にどのような漁がなされていたかということ、漁業に携わっている村はおよ

そ10種類くらいの魚貝類をとっていたようである。魚貝別にいくつの村が漁をしていたかを示すと、イカがもっとも多く39カ村、サバ33カ村、トビウオと昆布がともに29カ村で、以下、ブリ、タイ、ノリ、ザコ、ワカメ、ナマコとなっていた。

### 3. 林業

日本の島で、山の無い島は無い。海に面し、わずかばかりの平野があって其の背後に広範な山地が控えている。それ故に、島の生業は漁業、農業、林業が共存しているのが普通であった。隠岐も例外では無く、林業もしくは山に関わる仕事をしてきた。一例を示そう。島後の布施村には次のように記載されている。「一、山林 長壺里拾四町 幅壺里九町 家里ヨリ南ノ奥ニ、杉、椴、萬雑木、南谷、中谷、北谷とて在、(中略)、古来ヨリ良木多シ、今ハ半ハ尽たりといへとも、外の山林よりは茂レリ、松、椴、雑木、薪、材木伐出、商売ニ仕と、寛文九西ノ七月江戸へ書上ル」このように、いずれの村も材木は寛文時代以前に半ば、あるいは悉く尽きたとし、貞享時代現在は薪のみ伐り出して商売するか(卯敷村、有木村など)、あるいは薪も稀なり(東郷村、平村など)という村ばかりで、森林資源は枯渇し本格的な林業村は姿を消していた。

### 4. 皮革業・回船業

#### 1) 皮革業

牛馬飼育地であるから皮革製造も早くからあり、『隠州諸式年代記』(島根県立図書館蔵)によると、慶長15年に和泉国堺の田中新兵衛、儀兵衛、仁兵衛が時の領主堀尾山城守に運上上納し、西郷町要記で製革に当たったが幾日もなくして廃業した。しかし、運上金は村々に肩代わりされ、小物成りの中に牛皮役として賦課された<sup>(13)</sup>。貞享5年における村別の牛皮役を示したのが図5である。牧畑の盛んであった島前諸村で多額の牛皮役が課せられていたことがわかる。

#### 2) 回船業

隠岐59カ村中44カ村が船を所有している。総計1,056艘、1村平均18艘である。船の種類が記されており、大船(総計116艘)、手安船(485艘)、鱸戸船(455艘)、及び小海渡船(2艘)である(図6)。大船は80石以上、小渡海船は80石以下の回船で前者は主として木材、後者は俵物輸送をしていた<sup>(14)</sup>。最も多く使用されていた手安船とは小型の多目的船のことで肩幅五尺以上を手安舟、五尺以下をカンコ(黒木)あるいはサンパ(浦郷地区)という。いずれも同型の板張船で、漁業から、農作物、貨物の運搬、人の輸送などに使われた。ことにカンコは昭和四十年代頃まで用いられ、島の代表的な無動力船であった。

## Ⅶ 『増補隠州記』からみた地域像－地誌分析の意義－

### 1. 基礎地域としての藩政村とその世界



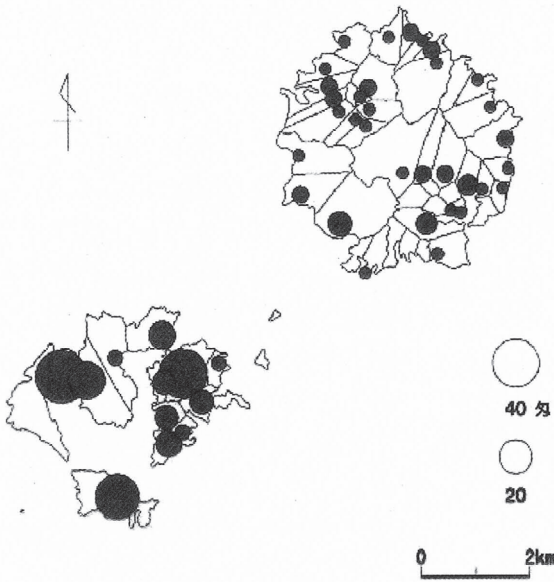


図5 牛皮役(1668)

日本中世の末期戦国時代に出現した豊臣秀吉により、百姓を土地に縛り付けるという「村切り」政策がとられ、厳密な土地把握をするためのいわゆる太閤検地が実施された。これを引き継ぐ形で農業をベースにした徳川幕藩体制が始り、前近代の政治的枠組、地域構成が確立した。

ここで誕生した村切りによる藩政村は、実質的な組織体として意味を持ち続け、明治時代以降も「大字」として現在に生きている。幕藩体制下の幕府及び藩はこの藩政村（以下、村という）を基礎単位として村請け制度

のもと税の徴収をおこなってきた。故に村単位で村を理解しておくことが為政者にとって必須の業務であった。そのための事業が地誌作成であり、それは為政者の交代の時期、領国再建の時期に多く編まれることになる。隠岐の地誌『増補隠州記』が作成された貞享5年(1688)もそのような時期であった。

さて、ここで問題にしたいのは、為政者(作成者)がいかなる観点で何を調査項目として村を調べ上げていったか、という点である。隠岐に限らず全国のこの種の地誌を概観するにつけ、共通しているのは、地理(地勢、位置など)、政治(知行、村役人など)、経済(村高、田畑、租税、物産など)、社会(戸数、人口、施設など)、文化(寺社、名所旧跡など)が、個別的な精粗の差はあるものの、網羅的に語られている。一つのまとまった世界(小宇宙)としてとらえられている点は注目すべきである。そして住民の側も出来ることならその村という世界内で生活を完結したいと努力している。その意味で村という領域はすこぶる重要なのである。対外交流はあくまで副次的、二次的なものであり、村落内での生活を豊かにするための手段であるといつてよかろう。とはいえ、それを無視しているのではなく、むしろ対外との関係を考察しなければ村落社会が理解できないという点は、筆者の最大に主張すべき視点であり、地誌分析の醍醐味はそこにある。

## 2. 地誌分析視角

地誌が従来の地理学研究、あるいは歴史学研究の中で取りあげられることはままあったが、それはあくまでも系統的な主題のもと、例えば人口、土地利用、新田開発研究などにおいて、その概観をおさえるために利用されたにすぎず、地誌その

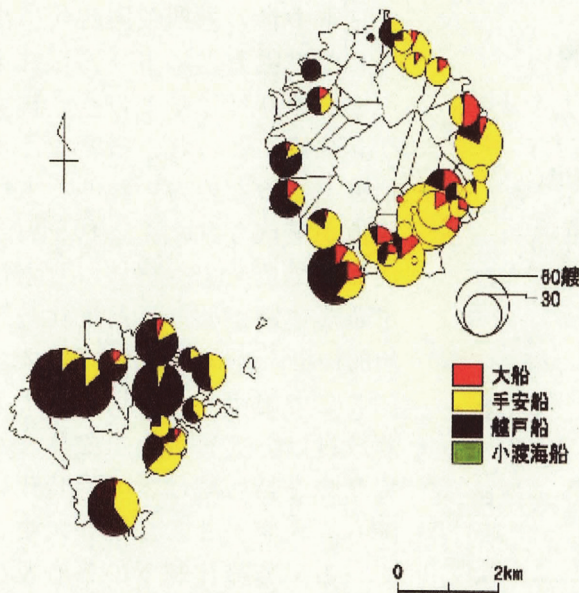


図6 船(1688)

えてきた。すなわち、隠岐の村落の生業は、農業、漁業、林業（山利用）の三位一体を基本としていたこと。それは戸口規模のいかんにかかわらずすべての村に水田、畑がもうけられ、新田畑開発がなされていたこと、海に面していない村（山村）を除いてすべての村に漁請役が課せられていた。

漁業は、海に面した海村ではすべてにおいてさかんであったが、多種多様の漁獲が村ごとに特化する形でおこなわれていたことが分布図によってよくわかる。日持ちする形での干物、塩漬け物が特産品として多くみられたことは、当時すでに域外との交易がかなり盛んであったことを物語っている。データベース化はしていないが、地誌項目の中に小島の記載が多く、その記載の中に好漁場が示されていることも多い。

林業においては近世初期には木材伐採が相当なされていたが、中期以降は入り会い林を利用する形で島後北東部諸村が活気をみせたものの、全体的には薪生産に小規模化していった。海村においても多くの村で山の記載があり利用されていた。例えば美田村「此焼火山ノ東西南北の尾谷を隔テ、皆山林也、美田ノ境内ニシテ所々ヨリ入テ、薪を取ル、入口別レテ有リ」。

こうした第一次産業を主とする社会において、それとの関連で皮革業、回船業が成り立っていたことも注目しておきたい。

隠岐の個々の村は生業のあり方に共通性を持っていたと同時に、その中身、特に漁業においてするどい個性をもっていた。それが隠岐全体という社会に置いて統合され、その主要部分が商業、交易という形で対外的にアピール出来るように調和していたといえよう。

ものを主役として扱われることはなかった。それはひとえに個別事項の記述の薄さ、網羅的記載によるわけであるが、見方をかえれば地誌研究はよみがえるであろう。すなわち、単一項目、系統項目のピックアップ利用型研究ではなく、地誌の特色を活かした総合的分析をめざすのである。

本研究で、地誌記載事項を付表で示したように出来る限りデータベース化し、分布図を描いたのはそのためである。こうした図表を比較考察することによって、次のような地域像が見

こうした生業に個々の百姓はいかにと取り組んできたのであろうか。この点に関して地誌は、次のように語る。都万村「一、田畑を耕シ、薪を伐、鰯、烏賊、和布、海苔、鯖、鮑等を取、漁の際に塩焼て家業とス」。生業における村単位での農・漁・林の三位一体が、実は家単位で実施されていたのである。時代は下がるが民俗学の調査がそれを示してくれる。直江廣治は昭和初期久見村の調査で「長い間そして現在においてもなお、生産の基礎は農業で、農の合間に海仕事と山仕事を営んでいる」といい、農、漁、山を総合した生産歴の表を掲げている<sup>(15)</sup>。横田健一・有坂隆道は昭和31年に釜村の旧庄屋の佐々木章氏から「村人はどの家でも皆漁に行く。昔は殆ど全部が行き、佐々木氏でさえイカ釣りに行った」と聞取る。釜村は海岸段丘上にあり、決して漁場に恵まれている訳ではない。農・山の村である。そんな村でさえ村人はこぞって漁にっていたのである<sup>(16)</sup>。

## Ⅷ おわりに

家族単位でバラエティにとんだ生業を行おうという姿勢、いわばミニ村落的行為、これが非常に強く見える。家族というミニ村落を多数抱えた自己完結指向の強い村落、そして個々の村落で達成され得なかった部分を、主産地形成というもう一つスケールの大きい領国内で補完させる装置を有していた。そのうえで対外交易を発展させてきたのが隠岐である。いや、こうした姿は隠岐だけではなく日本の前近代の村落構造の特色ではなかろうか。

地誌分析の魅力は総合的分析にあるといいながら、本稿では、生業関係を中心とした分析にとどまってしまった。本稿で全くふれなかった寺社を初めとする他の豊富な記載の分析および経済的諸項目との関連性を論ずるという大きな課題は残ったままである。他日を期したい。

## 注

- (1) 周吉郡西郷町中町 高梨文太夫所蔵、『新修島根県史』169-261頁。
- (2) 溝口常俊監修『江戸期なごやアトラス』名古屋市総務局、1998。
- (3) 永海一正『隠岐の歴史-改訂版-』今井書店、1986、96-97頁。
- (4) 尼寺村は、目次には登場するものの「家1軒、人数は年々国分寺村ノ内へ入ル」とあるから、単独の村とはせずに、国分寺村に編入した。同様に上東村は上西村に編入した。分布図を作成するに当たって、当時明瞭な郡境はそのまま用いたが、不明確であった各村の境界はティーセンの多角形作法、つまり各村の中心集落間の垂直二等分線を引く方法を用いて、便宜的に村境とした。
- (5) 溝口常俊「近世中期屋久島における家族構成と生産基盤」名古屋大学文学部論集・史学134、1999、175-205頁。
- (6) 速水保孝『隠岐国新風土記』山陰郷土文化研究所、1976、125頁。
- (7) 前掲 (4) 135-136頁。

- (8) 前掲 (4) 136頁。
- (9) 前掲 (4) 4-5頁。本稿は牧畑に焦点をあてた研究ではないので、その多くは語らないが、三橋時雄、田中豊治両氏の集大成的な研究の他に、地理学の分野でも早くから注目され、石田竜次郎（「隠岐島前の牧畑」地理学評論5-2、1929、1-20頁）、西川栄一（「隠岐牧畑に関する一考察」地理論叢8、1936、809-826頁）、石田寛（「放牧と垣内」人文地理12-2、1957、15-30頁）らの業績があり、近年においては長谷川孝治が個人牧場の発生からその変遷の過程を追究している（「隠岐牧畑の変貌－知夫里島における個人牧場の展開－」、浮田典良編『日本の農山漁村とその変容－歴史地理学的・社会地理学的考察－』大明堂、1989、355-370頁）。
- (10) 前掲 (5) 152頁。
- (11) 前掲 (3) 75-83頁。
- (12) 前掲 (5) 179頁。
- (13) 前掲 (5) 162頁。近世末期には皮革製造は松江で行われた模様で、隠岐からは死牛馬が松江の業者に送られている。取引は大庄屋と業者間の契約形態となっている。
- (14) 前掲 (5) 198頁。
- (15) 直江廣治「島根県隠地郡五箇村久見」、柳田国男指導日本民俗学会編『離島生活の研究』国書刊行会、1966、299-358頁。
- (16) 横田健一・有坂隆道「古文書と伝承を通じて見たる隠岐島の中近世史」、関西大学・島根大学『共同隠岐調査会編『隠岐－隠岐文化総合調査報告－』毎日新聞、1968、199-233頁。

# GIS Research on the Landscape of the Post-Medieval Villages in the Oki Isle

Mizoguchi Tsunetoshi

*Nagoya University*

The purpose of this study is to delineate the spatial differentiation in the Oki Islands by analyzing the local gazetteer "Zoho Inshuki" in 1688. This gazetteer presents us the informations by village as follows: 1)village lord, 2)major people in each village called *toshiyori*, 3)village estimation by *kokudaka*, 4)paddy and dry fields, 5)newly reclaimed land, 6)taxies for house, fishing, salt, agricultural products, oils, etc., 7)no. of houses by *honbyakusho* or independent farmers and *mawaki* or subordinate farmers, 8)no. of horses and oxen, 9)population by male and female, 10)temples and shrines, and 11)the distance to the nearby villages. We also get the descriptions for the typical sceneries of attached islands and mountains. In order to make historical maps of these information, I used the GIS software called "MANDARA" which is easy to handle for beginners.

As for the agriculture they mainly depended on the *makihata* in addition to paddy field and dry-field cultivation. The management of *makihata* is practiced by the cooperation of all the members of a village or a commune. It is divided into four sections, where rotation system was introduced and one of which is for fallow. There were 3,687 oxen and 2,971 horses in total, and they all were kept for *makihata* managing neither for dairy nor beef cattle. When they died, they were used for the leather industry which we could see in not a few villages.

Fishing in the Oki Island varied place to place. According to the distribution maps of fishes, *buri* was caught at Nakanoshima and in the southern part of Dogo, *iwashi* and *tobiuo* were got at Nishinoshima, and *nori* or sea weed were got around the northern Dogo seaside. Among these marine products, dried or salted catfish, *namako*, *awabi*, and miscellaneous fishes were important ones for exporting to main cities in Japan and also to China via Nagasaki. Thus small salt industry were engaged in many villages and the sea-transportation business developed in the villages having good harbor.

Though timbers were exported to Edo by ship in the 17<sup>th</sup> century for building materials, their demand was decreased sharply after the beginning of the 18<sup>th</sup> century. However, each village had its own forest and used timbers for firewood.

It is worthy to note that every village had a strong desire to engage in agriculture, fishery and forestry. Furthermore, closing-up the scale to the household level, it became clear that each household also managed trinity of agriculture, fishery and forestry. In different words, each village and household had compaund business which were agriculture and other works.